



# 鶴の便り 鶴の便り

夕鶴の里資料館報  
平成29年6月20日  
第78号  
発行 夕鶴の里  
Tel 47-5800

## 語り駅伝 大成功にて閉幕

去る五月二十八日(日)夕鶴の里友の会主催による、第十五回「語り駅伝」が開催されました。語り駅伝は、語り手が一本のたすきをかけて語り、次の語り手に繋いでいき、往路・復路を経てゴールとなる語りのイベントです。午後一時、友の会会長伊藤進司さんの挨拶で開幕し、語り駅伝がスタートしました。往路は、松橋信子さんの「蛙(ビッキ)の坊さま」から始まり、十名の方が語りを披露しました。復路は、夕鶴の里友の会役員による寸劇「猿の裁判」から始まり、九名の語り手がたすきを繋ぎ、白岩けい子さんの「白竜湖の琴の音」でゴールとなりました。

### ☆往路

- ・民話会ゆうづる
- ・松橋 信子『蛙(ビッキ)の坊さま』
- ・漆山小学校六年生
- ・高橋 晴香『飴は毒』
- ・漆山小学校六年生
- ・横山 徳郁『長い名の子』
- ・語り部養成講座受講生
- ・赤湯小学校二年生
- ・白岩 茉矢『クモとハチ』
- ・夕鶴の里友の会
- ・佐々木 恵子『真心の一文銭』
- ・話部「ゆるり座」
- ・木村 清子『毒まんじゅう』
- ・語り部養成講座受講生
- ・赤湯小学校五年生
- ・須崎 志帆『寝言兄弟』
- ・漆山小学校六年生
- ・平 彩乃
- ・『置賜のビッキと村山のビッキ』
- ・夕鶴の里友の会
- ・柿間 秀昭『おいてけぼり』
- ・夕鶴の里友の会
- ・松澤 ミツ子『卵の花姫伝説』

### ☆復路

- ・友の会役員
- ・寸劇『猿の裁判』
- ・夕鶴の里友の会
- ・井上 辰子『みのわのなげき』
- ・たかはた地区語り部の会
- ・井田 操子
- ・『だんなに行きたくない銭』
- ・中川小学校五年生
- ・笹 桃嘉『御駕籠八兵衛』
- ・中川小学校五年生
- ・井上 琴都『松尾神社の石段』
- ・中川小学校五年生
- ・鏡 芽音『日影の猫』
- ・夕鶴の里友の会
- ・伊藤 進司『月のうさぎ』
- ・語り部養成講座受講生
- ・宮内中学校一年生
- ・遠藤 優綺『禅問答』
- ・民話会ゆうづる
- ・齋藤 和子『貧乏の神と福の神』
- ・民話会ゆうづる
- ・白岩 けい子『白竜湖の琴の音』

当日の入場者は一三〇名を超え、大盛況!となりました。ご来場、ご協力頂いた皆様、誠にありがとうございました。たすきを通して語りを次世代へと繋ぐ、民話の楽しさを伝える事が出来ました。

このイベントの主催であります夕鶴の里友の会では、随時友の会の会員を募集しております。民話に興味のある方、ご入会をお待ちしております!

★入会・お問合せ

夕鶴の里友の会事務局

(夕鶴の里内)

Tel 0238-47-5800



# 語り部養成講座

## 開講

六月三日(土)に第十八回「語り部養成講座」の開講式が行われました。その後受講生は大人の部と子どもに分かれ、テキストを使いながら練習を行いました。



予告!

# 昔のあそび

七月二十二日(土)十時〜  
◎冷たい「プルプルおもち」を作ろう!

参加費：二百円

# お蚕さま 来たよ〜!

今年も夕鶴の里に、蚕がやってきました!六月七日(水)から夕鶴の里含め、市内八か所での飼育が始まりました。今年は寒い日が続きますが、蚕たちの成長が少し遅れていますが、どんどん大きくなっています!



6月15日



6月9日

6月7日



ご来館頂いたお客様も蚕を見て、「懐かしい」「私の家でも飼っていた」「初めて見た!」と、楽しそうにご覧になっていました。今では見る事も減ってしまいましたが、蚕について知って頂く機会になっているかと思えます。



桑の葉は蚕以外の昆虫には有毒です。葉を傷つけた時に葉脈から出る乳液で、虫から食べられないように身を守っています。蚕が桑の葉を食べても死なないのは、長い飼育の歴史の中で適応したためと考えられます。



## かいこ お蚕さま

綿は綿花から、麻は亜麻や芋麻などの植物から、アクリルは石油、ウールは羊、そして絹は、「お蚕さま」から。様々な原料からつくられる繊維の中でも、絹・シルクは天の虫と書く蚕(かいこ)がくれた自然素材です。

## あらゆる知恵が集まる、米どころならぬ「蚕どころ」

- 蚕から絹を作る「蚕業」には、
- ・桑を栽培する知恵(土壌学・植物学)
  - ・蚕を飼育する知恵(動物学・病理学)
  - ・絹糸を染める知恵(化学)
  - ・布を織る知恵(機械工学)

が生きています。これらは科学や技術の発達になることから、蚕業は産業としても注目されてきました。

そこで今回は、小さな蚕が持つ大きな可能性をその生態から見てみます。

蚕は人が家畜化した昆虫ですが、自然のままでは卵でひと冬を越し、翌年、桑の葉が芽吹く頃にふ化します。

卵を人工的に目覚めさせたり眠らせたりする技術を確立、現在は、春・初秋・晩秋と年4~6回の飼育が可能となっています。

(次号へ続く)